

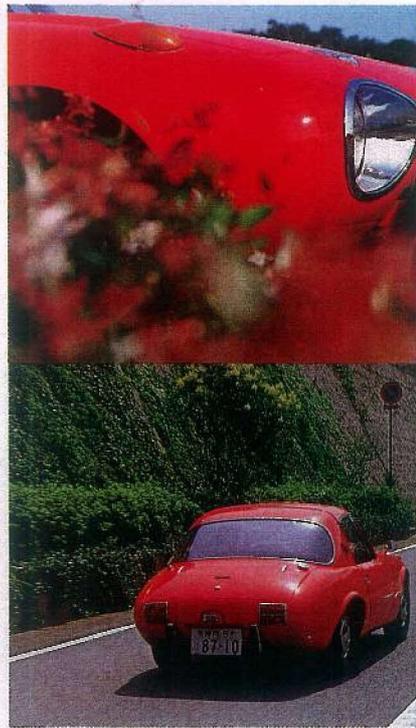
走らっヨタハチ
「かえんだ」

TOYOTA
SPORTS 800
UP15

本当の年は本人に失礼なので言わないが……
今でもWクラッチで六甲山を元気に上るといふ

高田さんと 22年目のヨタハチの場合

ヨタハチ以来、長い間トヨタから本格的な小型スポーツが造られることはなかった。現存するヨタハチのオーナーの中では高齢に入る高田日出子さんは、22年間、毎日ヨタハチを自分のアシとして愛用してきた。



●高田さんのヨタハチは44年型、つまり最終モデルと



ヨタハチの室内はお世辞にも広いとは言えない。だが、クルマとの一体感を味わうにはちょうどよい。日出子さんは巧みにシフトを繰り返して自分の手足のようにヨタハチを操る。

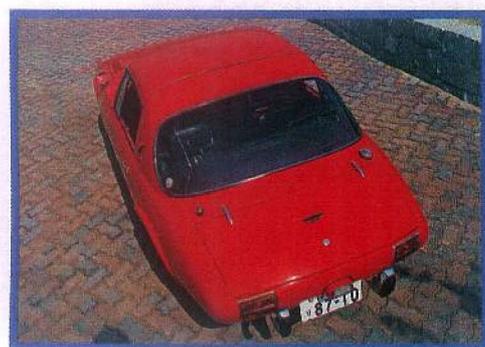
高田日出子さんにとって、ヨタハチは特別なクルマであるとはいえない。昭和46年に中古で購入してからずっと、自宅のガレージに住み着いて、「窓が曇ってしようがない」というよっぽどひどい雨の日以外は普段のアシとして働いている。もちろん、ご主人も免許を持っているし、常にファーストカーたるセダンもガレージにあったので、ヨタハチは高田家にとつては、日出子さんのクルマというだけ。

日出子さんの自宅は、神戸市西部の須磨海岸の近く、少し山の手寄ったところにある。自宅まで、商店が並ぶ幹線道路からは坂道が続く。毎日そこで練習したわけではないが、日出子さんは巧妙にダブルクラッチを使ってドライブする術を身に付けている。神戸というと、六甲山のワインディング・ロードが走り屋には知られるが、気が向いて山頂へ夜景を見に行く時も日出子さんは、今でも周囲のクルマに負けたことはないという。

日出子さんとヨタハチとの蜜月は今年で22年になる。

ご主人が医師で、往診用に購入したスクーター・ラビットが高田家のクルマ歴の始まりである。昭和22年のことだった。そして、24年に37年型ダットサン、29年に1952年型モリス・マイナー、翌30年にフラッシュサイドの1949年型フォード、39年に今度は丸テールの1953年型フォードと続く。

やや間を置いて、42年に同じフォードの1961年型ギャラクシー。やがて、子供が成長して手がからなくなった43年、ダッジ・ポララ1973年型に代替えすると同時に、ホンダ・モンキーが初めて日出子さんのアシとしてやって来た。自分のアシとしてモンキーを買ったのは、買い物や用事を済ませるのに便利と



●この角度から見ると、いかに純粋な小型スポーツカーを目指したかわかる。直射日光が西撃するのでトップは夏も開けないと本人。

いうこともあるが、もうひとつ理由があった。日出子さんにとって、人生の転換、あるいは、それまで抱いていた夢を実現するためのツールとして、いつでも使える自分のクルマが必要だったのである。今も自室を改造したアトリエを構え、始めは趣味だった油彩画の勉強を始めたのである。現在はやや抽象的な画風ではあるものの、絵のモチーフが風景ということ。自室は山のそばなので、習作をするための場所にはことかかない。スケッチブックとパステルや絵の具をモンキーの小さな荷台にくくり付けて、どこかへ出かけて行く毎日が続いたのである。

やがて本格的に絵画に取り組みようになり、スケッチブックだけでなくキャンバスやイーゼルを持参するには、モンキーの荷台は役不足になってくる。そうなると、やはり小さくてもクルマが欲しい。

「ヨタハチは、半ば息子たちから強制的に勧められたクルマ」と日出子さんは言う。まず、自分しか乗らないから2人乗れば十分、それに大きなクルマはいらない。という条件に、ちよっとお洒落心を加えて、初めはホンダS800が欲し